

## 研究ノート

## 米国イエール大学における宗教学に関する活動報告

A Report on Activities in Religious Studies at Yale University

佐久間 留理子\*

SAKUMA Ruriko

This paper is aimed at reporting my activities in Religious Studies at Yale University (New Haven, Connecticut, U.S.A.). I visited this university during September 11–15, 2018, and gave my presentation entitled “Incarnation and the Six-Syllable Formula of Avalokiteśvara in the *Kāraṇḍavyūha-sūtra*,” on September 13. In addition, I had casual, cordial interactions with some researchers and students. Through these activities, I had the opportunity to review my studies from a broader perspective than was possible previously. My presentation was sponsored by the Glorison fund and was the result of JSPS KAKENHI Grant Number JP 23520077.

キーワード：宗教学 (Religious Studies)、仏教研究 (Buddhist Studies)、イエール大学 (Yale University)

## 1. はじめに

## (1) 目的

2018年9月10日から16日まで海外出張を行い、米国コネチカット州ニューヘイヴンにあるイエール大学宗教学科を訪問した。短期間ではあったが、同大学において筆者の専門分野に関する講義を行なうとともに、関係者らと親しく交流する機会をもつことができた。本稿において現地の事情や体験した事柄を報告し、今後、宗教学について包括的に教育・研究を進めるための基礎的資料としたい。

## (2) 背景

## 1) 大阪観光大学における背景

2018年度より、本学において「宗教学」講義が中学校社会科の「教職に関する科目」として開講された。宗教学は、「哲学」講義とともに、中学校社会科教員免許の取得には必須科目の一つであるとともに、観光学部・国際交流学部の選択科目ともなっている。筆者は、2018年度前期に開講された「宗教学」講義を担当した。

「宗教学」講義の対象となる「宗教」には、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教、ヒンズー教、ジャイナ教、仏教、神道等の様々な種類の宗教が含まれている。筆者の専門分野は、これらの中、ヒンズー教の影響を強く受けた仏教の一形態である仏教タントリズム(密教)、及び、

後期大乘仏教であるが、宗教学を講述するためには、自らの専門分野のみならず幅広く様々な宗教にも視野を広げる必要がある。今回、イエール大学宗教学科において他分野を専門とする研究者や学生らと交流することによって、自らの研究を多面的に見直す機会となった。

## 2) 個人研究としての背景

これまで、筆者はインドにおける後期大乘仏教經典の一つである『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』(大乘莊嚴宝王經)を研究対象の一つとしてきた。この經典に関する研究は、平成23-25年度、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究(C)(課題番号23520077)研究課題名「『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』の文献学的研究」(研究代表者 佐久間留理子)として採択され、研究成果を公表してきた。今回、イエール大学宗教学科からの招聘により『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』に関する講義を行う機会を得た。なお、講義や旅費に関わる経費は、グロリソン基金(The Glorison Foundation)より資金的援助を受けた。

## 2. 日程と用務

日程と用務の概略について以下に述べる。

9月10日に成田国際空港を出発し、ニューヨーク・

\*所属 大阪観光大学観光学部

ケネディー国際空港経由して、9月10日の深夜、ハートフォード・ブラッドリー国際空港に到着した。11日の午前中は、ニューヘイヴン博物館 (New Haven Museum) 等を見学した。同日、17:30に、イエール大学のフィリス・グラノフ (Phyllis Granoff) 教授夫妻と会い、ホテル近くのイタリア料理店で夕食をとった。

9月12日の午後、イエール大学美術館 (Yale University Art Gallery) において、同美術館の事務官 (Administrator) であるアミ・ポッター (Ami Potter) 氏 (インド・アーメダーバード出身) とともに館内を見学した。同日、17:30に、イエール大学宗教学科のエリック・グリーン (Eric M. Greene) 教授とその指導学生に会い、ホテル近くのイタリア料理店において夕食をとった。

9月13日、11:50に、ロシア人留学生、中国人留学生、韓国人留学生と会い、昼食をとった。その後、ロシア人留学生とバイネッケ稀観書写本図書館 (Beinecke Rare Book & Manuscript Library) を見学した。15:30に大学宗教学科へ行き、講義の準備を行なった。16:30から18:00まで講義を行った。その後、グラノフ教授夫妻、ファンソー・キム (Hwansoo Kim) 教授、マーガレット・オリン (Margaret Olin) 教授、アミ・ポッター氏らとともに夕食をとった。

9月14日、9:30に、イエール大学チャプリン事務局へ行き、同大学のチャプリンであるシャロン・クグラー (Sharon M. K. Kugler) 氏と会い、同大学における学生支援活動の説明を受け、宗教関連施設を見学した。その後13:00頃に、イエール大学神学校へ行き、同校の伝道コレクション学芸員兼図書館司書であるクリス・アンダーソン (Chris Anderson) 氏らと面会した。同氏から神学校の歴史や組織に関する説明を聞き、付属図書館を見学して蔵書を閲覧した。

9月15日の昼、大学関係者と会食し、午後にはイエール大学英国美術館 (The British Art Museum) を見学した。17:00に滞在先のホテルを出発し、ハートフォード・ブラッドリー国際空港近くのホテルに到着した。

9月16日、早朝に空港 (同上) を出発し、ロサンゼルス国際空港を経由して、9月17日の夕刻に関西国際空港に帰着した。

### 3. 講義の概要

9月13日に『カーランダ・ヴェーハ・ストラ』(大乘莊嚴宝王經) における観自在の化身と六字真言

(Incarnations and the Six-Syllable Formula of Avalokiteśvara in the *Kāraṇḍavyūha-sūtra*) と題する講義を行った。その内容を簡略に述べておく。

この経典は、紀元6世紀頃に西北インドのギルギット地方で編纂された。この地にある仏塔からは、白樺の樹皮に書かれた二本の梵語 (サンスクリット語) 写本が発見されている。一方、この経典には、ネパールに伝えられた梵語写本もあり、その数は百本以上に上る。これらの中、最古の写本は11~12世紀頃のものであり、ギルギットの写本と比べてかなり後に書写されたものである。ギルギットの写本、及びネパールの写本に基づいた校訂本が各々出版されており、今回の講義ではこれらを一次資料として用いた。

この経典には、初期大乘仏教の経典の一つである『法華経』「普門品」に説かれる観自在 (観音) 菩薩の信仰を、さらに発展、拡充させた内容が説かれている。また、そこにはヒンズー教や密教の影響もみとめられる。経典に説かれる観自在菩薩の表現を類型化すれば、次の四つのタイプがみとめられる。

- (1) 輪廻世界に出現し生類を救済する表現
- (2) ヒンズー教に対する仏教の優位性を示す宇宙主的な表現
- (3) 毛孔をもった宇宙主的な表現
- (4) マンダラにおける六字真言 (女神化された六字大明) の表現

以上の四つの中、(1)は、「普門品」の信仰を基本とするが、さらにそれよりもヒンズー教や密教の影響が強くみられる。また、この表現には、観自在の化身としてヒンズー教の神々が数多く説かれているように、異宗教に対する寛容性が顕著にみとめられる。(2)は、ヒンズー教の宇宙生成論の影響を受けるとともに、異宗教に対する仏教の優位性を主張している。(3)には、初期大乘仏教経典の一つである『華嚴経』「入法界品」に登場する普賢菩薩の姿が反映されているが、(3)と「入法界品」とを比較した場合、(3)は阿弥陀信仰と直接的に関連づけられている点が特徴的である。(4)では、観自在菩薩の最高の精髓である「六字真言」が「六字大明」として女神化され、マンダラと呼ばれる密教的な図絵や祭壇において具象化されている。これは、ネパールの梵語写本のみで説かれ、ギルギットの梵語写本には説かれていない。後者の写本には、その代わりに別のマンダラが述べられているが、それには女神化された「六字大明」は見出されない。

以上のことから、ギルギットの梵語写本にみられるよ

うな最古のヴァージョンから、ネパールの梵語写本にみられるような後のヴァージョンが再編される際に、上述の (4) のタイプが導入されたのではないかと考えられる。また、それによって、(1)、(2)、(3) のタイプが、視覚的、象徴的に (4) によって統合されたことを指摘した<sup>(注1)</sup>。



写真 1 宗教学科の建物

#### 4. 宗教学に関する対話

講義後、大学関係者と対話する機会があった。筆者はかねてより疑問に思っていたことを、宗教学科の古参の教授に質問してみた。それは、「ジャイナ教は、仏教と同じ頃、紀元前四、五世紀にインドで興ったが、仏教は十二世紀初頭に滅ぶ一方、ジャイナ教は現在も少数派ながらも存続している。それはなぜか」というものである。この問いに対して、その教授は「知的には (intellectually)、ジャイナ教の方が仏教よりもインドにおいて主流 (mainstream) であったのではないか。仏教経典のサンスクリット語は、ジャイナ教のそれよりも、口語的、非標準的 (vulgate) である」と返答された。

われわれ日本人は日本に伝統仏教が残っているの、インドにおいても仏教の方が、ジャイナ教よりも主流であったのではないかとついつい考えてしまうが、知的には必ずしもそうとは言えないのかもしれないと、その返答を聞いて思った (但し、地域や時代によって事情は異なる)。この見解を直ちに証明することはできないが、少数派が知力を頼りにして存続することは十分に考えられる。現在のインドにみられる宗教の多様性は、知的伝統を堅持するいくつもの少数派によって支えられているのは事実である。

#### 5. 大学施設の訪問

##### (1) 神学校・付属図書館

同大学は 1701 年の創立以来、キリスト教の神学と教育が重要な役割を果たしてきた。その中核を担ってきた組織が、1822 年に神学部 (Theological Department) として設立された神学校 (The Divinity School) である (写真 2)。神学校と言えば、牧師を志望する男子ばかりの学生を想像しがちであるが、神学校のクリス・アンダーソン氏によれば、学生の約半数は女子学生である。また、海外からの留学生も多く、例えば、中国出身の尼僧の留学生がアジア宗教の研究分野で神学校に所属している。このように、現在の神学校は、キリスト教を基盤としながらも、従来のかたちにとらわれない幅広い宗教研究の機関となっている。



写真 2 神学校の建物

同神学校には、キリスト教やイエール大学関係の特別コレクションを収蔵する図書館が附置されている。筆者は、日本にとって本格的な国際化の幕開けであった明治時代に、どのような日本人留学生がイエール大学において宗教学や哲学を学んでいたのかについて興味があったので、同図書館において関係図書を開覧した。

1910 年版『イエール大学の卒業生名簿』における神学部の 1887 年の項目には<sup>(注2)</sup>、多数の西洋人の名前の中に、中島力造 (Nakashima, Rikizo) という日本人の名前を見出すことができた。この人物は、同志社英学校を卒業し、イエール大学に留学して哲学博士 (Ph.D.) を取得した俊英であり、神学校における最初の日本人留

学生でもあった。帰国後、東京帝国大学教授に着任し、倫理学を担当したことは広く知られている。

クリス・アンダーソン氏によれば、中島が学んでいた頃の神学校は、丘の上にある現在の校舎ではなく、町の中心部にあったという。学校は、教会を挟んだ二つの建物からなり、中島は西側の建物に寄宿していた(写真3)。当時の彼の留学生活を知る短い手紙が神学校の手紙集(1888年発行)の中に残されている。以下、その英文を和訳する。[] は、筆者が補ったものである。

「私は、9月の初めまでニューヘイヴンに滞在し、哲学[の本]を読んだ。それから三週間の休暇中にコネチカット州、ノーフォークへ行った。ラッド教授もまたそこにいた。彼とともに私は楽しい散歩を何度もした。ルーミス教授もそこにいたが、寂しそうに見えた。そこで私は彼に社交的であるようにつとめた。それで、『おはようございます、教授』と言った。彼は『おはよう』と言った。私は、彼の近くの椅子に座った。そこで彼は私に、『日本のどの地域から来たのか』と尋ねた。私は彼に『京都から来た』と答えた。彼は私に『京都の緯度は何度か』と尋ねた。私は『分かりません』と言わなければならなかった。その後、彼は驚いたような表情で『日本には多くの高い山があるのではないかと思うが?』と言った。私は『はい』と答えた。彼は『[高い山は]何フィートだね』と言った。私は『分かりません』と言った。彼は、うんざりしていた。そして、それがわれわれの会話の最後であった。私は、9月21日にニューヘイヴンに戻った後、研究を行なった。ポーター博士とともにヴントの『倫理学』、カントの『批判』(『純粹理性批判』、『実践理性批判』)を、ラッド教授とともにショーペンハウエルの『意志と表象としての世界』、生理学的心理学、『哲学百科』を、ラッセル教授とともに宗教哲学を、ハリス博士とともにドナーの神学体系を、スチーヴンス博士とともにミュラーの『罪の原理』を[研究した]。私は、イエール大学から哲学博士を[取得することを]意図している。私はあまり元気ではない。二週間前、私は熱を出して気分が悪くなった。今日はその日以来、初めて夕食のために階下に降りて行った。私[の体調]は着実によくなっている。数日で仕事ができるであろう。私は、夏の間一度説教を行なった。日本では三つの講演を行なった。10月26日、ニューヘイヴン、104 W. D.」(注3)。

この手紙から、中島はキリスト教神学のみならず、カントやショーペンハウエルの哲学、宗教哲学、哲学百科、心理学、倫理学といった様々な分野をバランスよく学んでいたことが窺える。また、手紙に登場するラッド教授

は、中島が帰国後に執筆した『教育的倫理学講義』(1912)にもその名が記載されている(注4)。それによれば、この教授が来日し、その著書『倫理哲学』を明治天皇に献上したこと等が述べられている。

さらに、この手紙からは、明確な目標をもって真摯に勉学に勤んでいた日本人留学生の姿が思い浮かぶ。中島と前後して米国に留学したキリスト教関係者には、新渡戸稲造(ジョンズ・ホプキンス大学)や内村鑑三(アマースト大学)らの札幌農学校出身者が知られている。いずれも明治の教育、思想の分野で活躍した人物であるが、中島もそのような逸材の一人であった。

今回、神学校図書館所蔵の貴重書を閲覧して、明治初頭の若者が食欲に西洋の精神文化を摂取しようとしていた様子と、そのような日本人を学生として受け入れ、哲学博士を授与した当時の大学の学術的な公平性、寛容性を知ることができた。

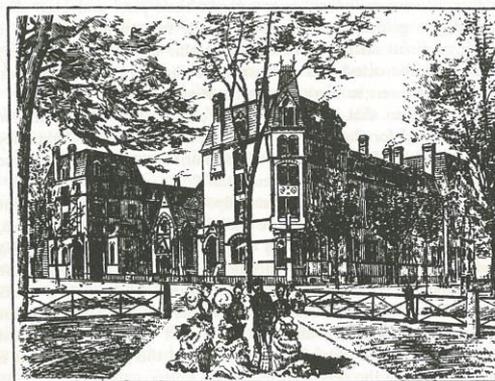


写真3 1875年の神学校の建物(中島は向かって左端の建物に寄宿していた)(R. H. Bainton, *Yale and the Ministry*, 1985 (1957), p. 163)

## (2) チャプリン・オフィスと礼拝施設等

ここで言う「チャプリン」(chaplain)は、「大学施設付きの牧師」を意味する。この牧師は大学生の生活支援を行なうことを任務とするが、単に施設等の物質的な側面のみならず、精神的な側面においても学生を支援する。イエール大学では、1927年に最初のチャプリンが着任して以降、歴代のチャプリンが学生支援活動を展開している。現在その任に就いているシャロン・クグラー氏によれば、彼女はイエール大学始まって以来、初の女性チャプリンであるという。牧師の世界にも女性が進出しており、頼もしい限りである。

チャプリン・オフィスの基本的な理念に、多文化・多宗教共生がある。例えば、この機関が発行する多宗教カ

レンダー (Multi-faith calendar) の表紙 (写真 4) には、円環の中に、ユダヤ教、イスラーム教、神道、仏教、ゾロアスター教、キリスト教、道教、シーク教、ヒンズー教、ネイティブ・アメリカンの伝統的宗教、バハイ教、ユニタリアン・ユニバーサリズム (北米の自由主義的なキリスト教宗派) のシンボル・マークが描かれており、その円環の中央には「あなたがたを、いつでも歓迎します」という言葉がプリントされている。

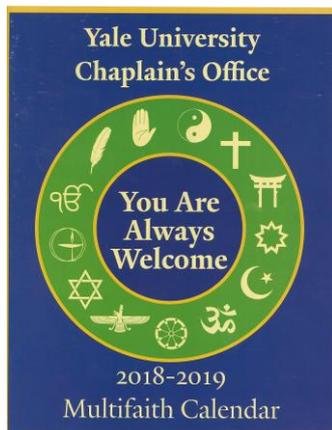


写真 4 多宗教カレンダー

このような理念のもと、チャプリン・オフィスは、学生の信仰する宗教の多様性に配慮し、様々な宗教の礼拝施設を管理・運営している。キャンパスには、キリスト教教会、禅センター、仏教寺院、ヒンズー教やイスラーム教の礼拝室等がある。例えば、ヒンズー教の礼拝室には、礼拝用の神像 (写真 5) や聖典が置かれ、壁には聖者ヴィヴェーカーナンダやインド独立の英雄ガンジーの肖像画が掲示されている。また、どのような宗教の人でも、あるいは、特に宗教を信奉しない人でも静かにくつろぐための瞑想室も完備されている。この部屋には人工の滝が流れ、自然に心が落ち着くような環境が整えられている。



### 写真 5 ヒンズー教礼拝室の祭壇

チャプリン・オフィスは、月一回夕食会を開いて学生同士の親睦を深めている。また、各宗教の祭・行事の日を多宗教カレンダーに記載するとともに、学生が自らの信奉する宗教の祭・行事を実施できるように援助している (他宗教の学生も見学できる)。このような活動は、様々な人種や宗教・信条を超えて学生の絆を深めようとするものであり、そこには多文化・多宗教共生を学生支援の基本的理念として重視する姿勢が見出される。

### (3) 美術館

イェール大学美術館 (1832 年設立) には、古代ギリシャ・ローマ美術、古代エジプト美術、古代・中世インド美術、チベット美術、日本美術、現代美術等の幅広いコレクションが展示されている (写真 6)。筆者が専門とするインドの宗教美術では、ヒンズー教の神像やジャイナ教の聖者像、密教尊像等が陳列されていた。同美術館のアミ・ポッター氏によれば、展示作品の大部分は、デジタル画像化されており、大学のホームページからも見ることができる。



写真 6 イェール大学美術館の展示室

## 6. 結びにかえて～まとめと今後の展望～

今回の活動を通して最も印象に残ったことは、多様な文化、宗教、人種に対する寛容性である。それは、大学組織、教職員、学生 (世界各国からの多数の留学生を含む) に一貫して流れているエートスとでも言うべきものである。こうした精神の背景には、近代コスモポリタニズム (cosmopolitanism) <sup>(注 5)</sup> があるものと思われる。それは、世界史上、その名称のみが利用されたり、あるいは、そのような精神そのものが批判されることもあった

が、国際化の著しいこの時代において、やはり普遍的価値をもつものであることを再認識した。

筆者が今回の講義において指摘したように、仏教にも異宗教に対する寛容性がみとめられる。確かにそれは、近代コスモポリタニズムにおけるものとは同一ではないが、両者には部分的に通ずるものがあるように思われる。例えば、仏教が国家や民族の壁を超えてアジア各地に広まり世界宗教となったのも、そのためであろう。今後、宗教学に関連して、仏教のみならず、他の宗教についても教育・研究を展開する際には、多文化・多宗教共生に関わる寛容思想を軸に考察を深めてゆきたいと考えている。

#### 【補注】

1) この講義の内容は、佐久間 [2006] を大幅に加筆修正したものである。また、その英文を改訂した論文である“Appearances of Avalokiteśvara in the *Kāraṇḍavyūha-sūtra*: Their Functions and Religious Backgrounds” (『カーランダ・ヴェーハ・スートラ』における観自在の諸相: それらの機能と宗教的背景) を、名古屋大学大学院文学研究科インド哲学分野・専門 (研究室) が発行する英文学術雑誌 *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism, Sambhāṣā* 35: 73-97 (インド文化・仏教に関する名古屋における研究: サンバーシャー、第 35 号、73-97 頁) において公表する (平成 31 年 3 月 31 日発行)。

2) [Yale Divinity School 1910: 276]

3) [Nakashima 1888]

4) [中島 1917 (1912): 201-202]

5) 「十八世紀後半の啓蒙思想において、人類全体の成長と教育を謳ったレッシングの宗教思想や、永遠平和のための世界市民体制の実現を構想したカントの政治思想は、近代コスモポリタニズムの代表と言える」[廣松、他 1998: 525]。

#### 【引用・参考文献】

[日本語文献]

佐久間留理子

2006 『カーランダ・ヴェーハ』における観自在菩薩の身体観『印度学仏教学研究』55 (1) [110]: (92)-(97), 419-421.

中島力造

1917 (1912) 『教育的倫理学講義』弘道館。

廣松渉、子安宣邦、三島憲一、宮本久雄、佐々木力、野家啓一、末木文美士 (編)

1998 『岩波 哲学・思想事典』、岩波書店。

[外国語文献]

Baiton, Ronald H.

1985 (1957) *Yale and the Ministry, A History of Education for the Christian Ministry at Yale from the founding in 1701*, New York etc. : Harper & Row, Publishers.

Nakashima, Rikizo

1888 “Nakashima Rikizo”, in *Letters from the Class of '87, Yale Divinity School*, Boston: Cutter Tower Co., pp. 14-15.

Yale Divinity School (ed.)

1910 *Directory of the Living Graduates Yale University*, New Haven: The Tuttle, Morehouse & Taylor Company.